

# 第一章

## ハイラルの戦い

## 戦火開く

満州国興安北省ハイラルに新任の陸軍軍医中尉として赴任したのは昭和十九年の十二月下旬であった。それから敗戦まで八ヶ月間の私の軍医生活が始まったのである。

昭和二十年八月八日は大詔奉戴日であったが、私の勤務する第一大隊の第三中隊に腸チフスが発生したため、波南地区（ハイラルの東方三十キロ位の地点）に陣地構築のため派遣されていた、その第三中隊の分遣隊を診察するため、早朝よりトラックに乗って出発した。その日は日ソ開戦の前日とは思えない程長閑かな日で、無数の名も知らぬ草花が咲き乱れる草原を走る時は、ピクニックにでも行くような感じであった。

波南地区に着いて全員を検診し、腸チフスらしい患者がいないことを確かめ、夕方六時頃官舎に帰った。そして腸チフスのことを勉強しながら就寝したが、八月九日の午前三時頃であったと記憶している。

八月九日午前五時頃「軍医殿、軍医殿、非常呼集です」との伝令の声に目を覚ました。

伝令は捧げ銃をして「ただいまから部隊へ直ぐ御出で下さい」と言う。何のための非常呼集かなあと考えながら、部隊に急いだ。医官室でしばらく休憩していると飛行機の爆音が聞える。

着任以来絶えて聞かなかつた爆音なので、営庭に出て見た。その瞬間、双胴のソ連軍の飛行機の数機がかなりの低空で、私の部隊のすぐ近く三百メートル位にある浜州線の鉄橋を狙つて五六発の爆弾を落した。東京では空襲には数回あつていたものの余りの近さにびっくりしたのと同時に、日ソ戦が始つたと即座に感じた。ボヤボヤしてはおられない。我が軍の装備とドイツ軍を破つたソ連の軍事力を比較すれば、ハイラルが敵手に落ち、我々が全滅するのに三日とはかからないのではないかと直感した。万事休すである。一番残念であつたのは戦死することではなく、せつかく四年近い年月をかけて研鑽した医学を何等役立たすこともなく、このまま死ぬのかということであつた。

午前七時四十分頃、第二波の空襲があり、谷口部隊長と工兵隊長の兵舎のまわりに爆撃をうけた。同日、午前十時頃、谷口部隊長の兵舎の近くに、第三波の空襲を受けた。第二波の空襲の時も第三波の空襲の時も、二、三メートルの近くまで爆撃を受けたが、全員防空壕に入つたので無事であつた。営門では重機関銃が最後まで大活躍した。

私達の兵舎の裏は第二地区と呼ばれ、丘の中に堅固な要塞が隠されていた。その中に入れば、敵の砲爆撃に対して安全なのであるが部隊長はなかなか配備につこうとしない。「師団からハイラル撤退命令が出て、興安嶺の一一九師団の陣地構築地に退がるかも知れない。それまで陣地

「配備につくのを待とう」というのである。しかし結局は師団長の判断で私達の独立混成第八十旅団はハイラル守備、一一九師団は興安嶺のプハトにて敵を迎え撃つことになった。

訓練計画によれば、この日から八日後の八月十七日より要塞守備の配置をすることになっていたのであるが、その前に戦争が勃発したので、要塞の内部事情が全く分からぬままに、それまで第八国境守備隊が管理していた要塞に入ったのである。私も弱冠ではあるが高級軍医であり、旅団の軍医の中では三番目に位していた。陣地で私は軍刀を杖に一世一代の熱弁をふるった。「我々が一日でも長くハイラルを守ることは、興安嶺の一一九師団に充分な陣地構築の時間をかせがせることになり、それはひいては日本の興廃にも影響する。各人全力を尽して使命を全うして貰いたい」私より五歳も十歳も年長の衛生兵を前に私は所信を述べた。最後には不覚にも涙が流れた。これ等の善良な兵隊が何故戦争のために死なねばならぬのであろうか。ソ連さえ攻めて来なければ昨日と同じ生活が今日も待っていたのに、何と戦争とは非情無残なものかと思つた。

私は決して勇者ではない。むしろ弱者である。ありていに言えば戦線離脱をして後方の安全な所に退りたいというのが本心であつたが、将校が戦いを前に逃げるとはプライドが許さない。私は若いから見掛けだけでも張り切つていたが、他部隊の軍医は、私が「頑張つて戦いましよ」と声をかけても、シヨンポリしてうつむいたまま返事をしなかつたが、それは彼が私より

年もとり世故にたけていたため、戦いの趨勢を知っていたからかも知れない。ただ、その時感じたことは、最後は私はいさぎよく戦って地上で太陽の下で死にたいということであった。要塞の地下深くで死ねば後日妻や弟妹が戦場を訪れた時、私の死んだ場所を知ることが出来ないのではないかと危惧したからである。

部隊本部で長崎高商出身の田中中尉と敗戦まで毎日話しあつたが、その時何時も口に出るのは「子供を作っておかなかつたのが残念だつた」という嘆声であつた。

一応陣地配備も終わつて夕闇迫る頃、赤々と燃える西山にしやまの貨物廠やハイラル市街を見ながら、部隊長と二人でトーチカの上に坐つた。部隊長は機密書類をマツチで一枚一枚焼き捨てながら、「ハイラルも終わりだなあ」と独語した。パチパチと音を立てて燃える市街の業火は死を目前に控えた私にとっては、その時一幅の絵のようにさえ思われた。「俺もハイラルもここで亡びるかも知れない。しかし祖国日本よ、是非とも戦に勝つて我々の死を無駄にしないでくれ」そんな思いが私の胸を去来した。

その夜、望見した満州里方向にはソ連軍の無数の燈火がきらめき、延々長蛇の列の車輛がハイラルを直指して驍進して来た。守るは旅団将兵約六千、攻むるは精銳のソ連軍約二万、運命の戦いの幕は切つて落とされたのである。関特演（関東軍特別演習）の時ならいざ知らず、櫛の齒の抜けたように弱化したハイラル部隊の命運は旦夕に迫つたといつてもよい戦況であつた。

「ハイラルは陸のアッツ島だ」と言つて引き上げたという師団将校の言葉が気にかかる。

朝から何も食べていないのに気付き、あわてて朝昼晩の食事を一緒にした握り飯を頬張り、部隊長室の一隅の寝台に横たわる。八木橋軍医大尉の指揮する野戦病院が私達の地下壕に開設されることになったので、私は専らそちらとの連絡要員のような形で大隊本部に泊り込んだ訳である。大隊本部といつても八畳敷位の部屋が二つあるのみで、一つの部屋に大隊長や副官や私、隣の部屋に事務係の下士官数名が入っているような状況であつた。昼間、初めて配備にくく要塞の構造を見回つたためか疲れてしまつて、私はグッスリ眠り込んだ。明日のことは明日だと悟り切つて寝たといつても良い。

思えば私と共に七名の新任の軍医がハイラルに着任したが、指折り数えてみると、私以外の他の者は皆師団と行動を共にして興安嶺に下がり残っているのは私だけになつてしまつたようである。真先に戦死するのは私だったのかと暗然とする。降伏ということが建軍以来なかつた日本の国状としては、そう考える以外になかつた。死ぬときは長崎医科大学卒業の軍医として恥ずかしくないように死にたいとのみ考えた。戦陣訓の「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪過の汚名を残すこと勿れ」という言葉が私の心の中には生きていたのである。